

日程	平成29年7月11日(火)～7月13日
視察先・視察内容	①福井県あわら市：芦原温泉駅周辺整備計画について ②石川県輪島市：回遊性と賑わいのあるまちづくりについて ③石川県七尾市：都市再生整備計画事業について

①福井県あわら市：芦原温泉駅周辺整備計画について

概要 28756人 人口増加率マイナス4.12%
人口比率(年少12.38% 生産年齢61.01% 老年26.53%)
あわら温泉は関西・中京のおく座敷と呼ばれ、年間100万人以上の観光客が訪れる福井県随一の温泉観光地。北陸新幹線金沢開業とその後の福井県内延伸による関東、信越方面からの交流人口の増加を見据える。

視察内容 北陸新幹線芦原温泉駅の開業にむけて周辺の整備計画を視察した。

計画課題として

- ①新幹線駅設置に対応した受け皿づくり
 - ②地区内に散在する低未利用地の活用
 - ③観光地への玄関口にふさわしい駅周辺のまちづくり
- を掲げ、計画を策定。



定住環境の向上として、駅の東西を結ぶ自由通路を計画し、東西市街地の一体化を図る。

広域交通ターミナルの強化として、東口・西口に駅前広場とアクセス道路を整備。在来線・新幹線、両方の駅舎の真ん中を自由通路で一体化する。

駅西口では賑わい・交流ゾーンとして三つのエリアの特性を生かし、位置づけている。

- ①交流拠点エリア ・常時賑わいを創出するため、人々の交流や様々な情報の発信地へ。
- ②駅前商店街エリア ・まちなか回遊を促進するため、商店街のリノベーションを。
・新幹線開業を契機に商店街を活性化させる。
- ③うるおいエリア
・駅周辺であっても自然を身近に感じ、ゆったりとした時間を過ごせるために、竹田川の空間を生かす。
・駅前だけでなく、竹田川までを含めた歩行者の回遊を促し、一帯の賑わいを創出。

これらの整備基本計画をもとに、賑わいと交流ゾーンにおいて、芦原温泉駅周辺賑わい創出事業が展開されている。

「都会にはない贅沢があるまち」をコンセプトに芦原温泉駅周辺のまちづくりの方向性を示す将来デザインを描く。市内全世帯、全小・中・高校生、企業、市外者も含めた「あわらの未来づくりアンケート」や「市民ワークショップ」を実施し、地域ブランド戦略会議直属の専門部会「芦原温泉駅まちづくりデザイン部会」による検討を重ね、三組のデザイナーに市民の声を広く反映するものとして描いた。

平成28年11月27日にデザイナーによる公開プレゼンテーションを実施し、市民投票のより選ばれた将来デザインの理念を踏まえ、芦原温泉駅周辺まちづくりを進めていく。選ばれたデザインコンセプトを具現化するため、ワークショップを定期的開催し市民の声をさらに反映させていくスケジュールが決定している。



①福井県あわら市：芦原温泉駅周辺整備計画について

芦原温泉駅周辺賑わい創出事業に関して

芦原温泉駅周辺賑わい創出協議会(プラン策定機関)

委員 学識経験者、新富繁栄会、景観まちづくり協議会(新富・天王・水口区)
都市計画審議会、まちづくりデザイン部会、芦原温泉駅前再興会議、
市商工会、市観光協会、女将の会、福井県、伊藤孝紀デザイナー、
金融機関、あわら市

事務局 市新幹線まちづくり課、(有)タイプ・エービー(伊藤デザイナー所属事務所)

市長を会長とする「あわら市地域ブランド戦略会議」は計画推進の最高意思決定機関であり、賑わい創出協議会からのまちづくりプランの提言を受け、「ブランド専門部会」や「芦原温泉駅まちづくりデザイン部会」「庁内検討会議」に落とし込みをしていく。

駅周辺賑わい創出の実行部隊の「(仮)まちづくり会社」、「景観まちづくり協議会」は地区代表者で校正される法廷協議会で、様々な団体が事業体制のそれぞれの役割を担っている。



写真
市民投票により選ばれた
将来デザイン

所感

新幹線駅開業に向けて、市民・地域・企業・行政等オールあわら市で取り組まれている。まちづくりの方向性の将来デザインを見せての市民投票は、市民が計画の初期からイメージを共有して携わっていける、いい事例であると感じた。まちづくりは市民一人一人の理念の実現から始まるのが理想であり、その理念を各種団体が形にしていき、その都度市民の声を聞くスケジュールも良い。芦原温泉駅から芦原温泉まで徒歩では不可能な距離であるので、観光の中心である温泉街とどう結ぶのか、その観光のための動線にも今後注目したい。本市では、基幹駅から歩くまちづくりが計画進行中であるが、QRUWAの動線にどのようなソフトを充実させていくのか、今一度将来デザインを市民全員が感じる必要がある。東岡崎から歩いて楽しむまちづくりをいまだに否定的にとらえる人もいる現状を踏まえ、北東街区のイメージ動画のような将来デザインをQRUWA全体に広げて、共有できれば市民の方々にも伝わりやすいのではないかと思います。市民の方々のまちづくりへの興味と関心をもっと刺激し、まちづくりに参加してもらうことが必要性を強く感じた。

②石川県輪島市:回遊性と賑わいのあるまちづくりについて

概要 27205人 人口増加率マイナス8.89%
人口比率(年少9.54% 生産年齢52.24% 老年38.03%)
豊かな緑と海に囲まれ、15年2月に「能登自動車道」が七尾ICまで開通、3月には「北陸新幹線」が開業となり、能登までの交通アクセスが向上した。
輪島塗はもちろん、海女さんの数、白米の千枚田での太陽光発電LEDディスプレイは世界最大であり世界記録を誇るなどが日本一となっている。

視察内容 65年間利用された鉄道の廃線がまちづくりの起爆剤となる。
駅前通り(県事業)からスタートする。
バブル崩壊・鉄道廃線・能登半島地震の三つの転機により、動き出した。



都市ルネッサンス事業(県事業)

洋風でも和風でもない「輪風」なまちづくりをキーワードに、展開していった。

輪島まちづくり協定項目

遵守事項・・・こころの調和 1mのセットバック

尊重事項・・・まちなみの「調和」 伝統様式「浜屋づくり」 新しい様式美
輪島らしい素材・色 隣どうしの工夫 店づくりの基本 ディスプレイ
バリアフリー

参考事項・・・輪島らしい装飾 建物前面の工夫 訪れる人への輪島らしい工夫
色の見せ方 看板・広告・自動販売機

これらの項目を協議し、遵守事項・尊重事項・参考事項と項目ごとの守るべき重要度を制定した。

まず注目すべきは、歩道3.5mにさらにセットバック1mを加え、4.5mの歩行空間を確保。ゆったりと歩けることはもちろん、リアカーでの移動販売者に考慮したときいた。輪島らしい空間を公共空間とセットバックによる民有空間とで構成している。

住民が主体となって策定した「輪風まちづくり協定」に基づき、ふらっと訪夢(道の駅わじま)から朝市通りへ向かう街路から、輪島らしい町並みの再生と賑わいの演出、回遊性の向上を目的とした、沿道整備と町並み景観形成を一体的に行った。



黒瓦に切りつま屋根の伝統様式、木材を使った店作り、歩道灯や歩道作成の材料にアワビの殻を混合させたり、また歩道状のベンチは輪島塗りの液をためる桶のイメージで作成されたり随所で輪島らしい取り組みが見られた。

本町・朝市通り(まちづくり総合支援事業)

- ・輪島朝市は平安時代お宮の境内のぶつぶつ交換から始まり1200年の歴史を持つ。
- ・現在は、200～250の店舗が年間約335日開催している。
- ・能登の女性は働き者だといわれるが、朝市においても女性が活躍している。

②石川県輪島市:回遊性と賑わいのあるまちづくりについて

本町・朝市通り(まちづくり総合支援事業)

輪島朝市はバブル期には年間200万人の観光客が訪れていたが、その後は減少の一途をたどる。

整備事業として

・電線類の地中化による開放感の創出

・自然石舗装による石畳を演出

これらの事業結果、朝市と商店街が共存している特殊な道路の活用を生かしつつ、整備されている。

また路面はさくらと黒の御影石で色分けし、朝市時には露店の出店エリアの線引きとして、また通常は歩道として利用できるよう工夫されている。



鳳至上町地区(まちなみ整備事業)

鳳至上町地区は伝統産業である輪島塗りの塗師に家が多く残る地区であり、家屋の修景や道路の美装化、小公園の整備をおこなった。伝統的家屋を保存するとともに、通りに面する外部建具は木製格子とするなどたたくまいと調和する歴史的な町並みを形成するための事業として取り組んでいる。(補助三分の二200万円限度)

整備後、「まれ」「釣りバカ日誌」のシーンで使用されている地区である。

マリンタウンプロジェクト(社会資本整備事業)

(平成26年完了)

輪島港を中心とした臨海部を埋め立て、海・陸一体となったまちづくりを推進している。ホテルや交流施設、マリーナ、スポーツ競技場と整備し、平成28年7月に広場に遊具を整備し、観光の枠をこえた交流が生まれている。

所感

回遊性と賑わいのあるまちづくりを市街地で共通イメージで展開していている。歩くことを重視した道路計画で、歩いて楽しいまちづくりの実践ができていることは、本市のまちづくりの参考になると感じた。「輪風まちづくり協定」を別の計画にも採用し、計画や地域が変わっても基本コンセプトが変わることなく、まちづくり整備が進められている。

朝市、千枚田を観光バスで回ってしまう観光プランが多く、少しでも滞在してもらうために、マリンタウン・朝市用駐車場では昼から無料になるなどの施策もあった。少しでも長く滞在してもらう目的が明確な取り組みは参考になる事例である。

本市の場合は駐車場無料サービスが充実しており、少しでも長く滞在してもらうソフト面での施策が重要である。

朝市通りとマリンタウンと飲み屋街の三角の中心部に歩ける町並みと足湯を設置していることなどは本市にも参考になる事例である。

周遊できるまちづくりを実践している輪島市の取り組みは本市の掲げる「歩きたくなるまちづくり」の参考になると感じた。

また統一感のとれた町並みは、フィルムコネクションにより映画やドラマの撮影地で使われれば観光資源のPRにもなる。

今後も輪島市の事例をもとに、本市のまちづくりへの提言を続けていきたい。

また千枚田での太陽光発電LEDディスプレイは本市のイベント時にも活用できるものであるので要望していきたい。



御陣乗太鼓(キリコ会館広場)



③石川県七尾市:都市再生整備計画事業について

概要 55348人 人口増加率マイナス4.41%
人口比率(年少11.97% 生産年齢58.38% 老年29.56%)
能登観光拠点の和倉温泉を要し、自動車道整備、北陸新幹線金沢駅開業により、インバウンドを含む交流人口の拡大、石川の食文化と世界遺産を活用した第6次産業化等を推進している。また室町時代は畑山氏、江戸時代は前田氏の城下町であった。

視察内容 七尾市中心市街地観光交流センターにて

古くからの城下町として、また天然の良港を有し港町としても発展した。

現在、中心市街地では「小丸山城公園」「山の寺寺院群」「七尾美術館」などの観光資源が点在していることから、滞在時間が短く、地域商店での消費額が少なく、年々商店街は衰退していった。

平成16年より一本杉通り振興会が、幕末から明治にかけて加賀藩領内では花嫁が嫁ぎ先にのれんを持っていく風習を利用し、これらのれんを通りに掲げる「花嫁のれん展」を開催。平成23年に通年的に観光客を受け入れたいとして、空き家を活用した花嫁のれん常設展示城を開設。年々、観光客や観光バスでの団体客等の増加により、現在の中心市街地観光交流センターとして「花嫁のれん館」と「寄り合い処みそぎ」を平成28年4月にオープンした。



中心市街地の課題

- ・観光資源は豊富に点在しており、回遊性に乏しく、一体感がない。
- ・空き店舗・空き家が年々増加し、商店街の活力が低下している。
- ・地域資源区域ごとの観光になっており、総合的な観光が行えていない。



課題解決にむけて作成した。

都市再生整備計画事業

- 歴史・文化遺産を活用したまちなかのにぎわいづくりを大目標とする。
- 目標(1)歩く楽しさが体感できる「みち」の演出による交流人口の拡大
 - 目標(2)「アートとのれん」が彩る商店街のにぎわいづくりによる集客力の向上
 - 目標(3)まちなか地域資源の魅力再発見による住民意識の向上



花嫁のれん館では花嫁のれんの常設展示はもちろん館内ではガイドによる説明も受けられる。展示ののれんは市民から借りたものも多く、展示テーマによって募集している。現在も毎年4月29日の「花嫁道中」なるお祭りにて花嫁のれんを古き良き風習として、受け継がれている。(24000人参加)
施設の建設には石川産木材を優先使用している。

③石川県七尾市:都市再生整備計画事業について

まちづくりの基本的な考え方

歴史・自然ゾーン……山の寺寺院群を中心に地域資源、茶室、自然遊歩道
歴史・美術ゾーン……美術館を中心に美術の地域資源と歴市資源
歴市・文化ゾーン……小丸山城、花嫁のれん館を中心に文化の地域資源
三つの観光ゾーンを形成し、花嫁のれん館から歴史軸として、商店街の歩くまちづくりを。
また歴史軸と交差させる都心軸には七尾駅と能登食彩広場の二つの核施設を設置する。



歴市軸の商店街通り 道路サインにも歴軸としての工夫が見られる 二つの核を結ぶ都心軸 御祓川の両岸

歩く楽しさを体感し回遊性を高め、「のれん」が彩る商店街では歩く人が賑わいを作ることで商店街の活性化をはかり、また地域再発見によるまちなかの定住促進を求めている。ブロック系舗装での市道整備も取り組まれている。

能登食彩広場は年間80万人の集客があり、来訪者をまちなかに誘導することを最重要目的としている。観光ボランティアガイドや語り部処など民間の取り組みと連携した取り組みがあり、まちなか誘導の役割を果たしている。



所感

80万人の集客力を誇る能登食彩広場と和倉温泉への観光客をいかに七尾市内の観光資源に足を運ばせるかという目的が明確であり、回遊路の高質舗装整備やサイン整備により歩きたくなる「みち」づくりは本市のまちづくりの参考になる取り組みと言える。

七尾駅からは、食彩広場は徒歩10分、花嫁のれん館は歴史軸経由で徒歩10分、また花嫁のれん館から山の寺寺院群・七尾美術館へそれぞれ徒歩5分であるので、2時間くらいの歩きながら休憩しつつのまちなか観光が可能であるので、本市よりコンパクトな歩くまちづくりが実践できる環境にある。

本市は38万人という人口があり、観光客と併せて「岡崎再発見」と「休日は岡崎で」をテーマに歩くまちづくりをするも良いかと思われる。

七尾市の川沿い空間の演出は本市の計画にも参考になる事例で、本市においても市外からの観光客の誘導と市民がゆったり過ごせる川まちづくりを進めていき、定住したくなるまちへの取り組みを併せて提言していきたい。

民間施設や民間事業者の委託運営の観光施設にもまちづくりの共通イメージを持つ必要がある。各事業の連携を強化し、各施設への相乗効果をもたらす取り組み、とりわけQRUWAでは高質舗装整備を統一感をもって進めてほしい。

まだまだ本市は車社会であり、駐車場の有無が集客の原動力になっていることは否めない。しかし、歩きたくなるまちづくりは、健康・地域活性化のためにも必要であり、またパークアンドライド可能な拠点からの歩くまちづくりの計画も必要である。

岡崎市の都市再生整備計画において現在の主要駅からの歩くまちづくりを実現し、歩いている空間のハード面での整備はもちろん、ソフト面での充実もはかりたい。

歩くためには、夏の猛暑への対策や急な雨などの対策も必要であるので、そのような事例も研究し提言を続けていきたい。